二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版
変幻戦士
イルステラ
Illusion Stellar
小説 NOVEL／蒼井村正
あおいむらまさ

第一回　変幻戦士参上！　006
第二回　決戦！　セントラルドーム　060
第三回　変幻戦士、陵辱　110
最終回　陵辱の果てに　174
エピローグ　251

登場人物紹介

Characters

十条寺 敦子（じゅうじょうじ あつこ）

富豪の令嬢にして文武両道のスーパー女子学生。正義のため、イリュージョンステラに変身して戦う。

峰岸 朋美（みねぎし ともみ）

十条寺家のメイド少女。敦子に無理強いされる形でガンメイドに変身することに。

藤島 佳乃（ふじしま よしの）

敦子と「健全な同性恋愛関係」にある後輩少女。

ドクタービドー

アンドロイド軍団を率いる悪の天才科学者。

ヴァネッサ

イリュージョンステラを斃すため、ビドーが造り出した戦闘用強化人間。

『第三回　変幻戦士、陵辱』より

「やはりイリュージョンステラを嬲るなら、この格好でなくてはね……」
背後に回ったリーダー格の青年は、コスチュームの背中部分を無造作に掴み、真上に引っ張り上げた。すでに股間に食い込むほどに密着していた薄布がゴムのような伸縮性を発揮してさらに深く秘裂にめり込む。
まだジンジンと疼いているクリットが恥骨にめり込んでしまいそうなほどのハードな圧着を受けた。薄布に押し潰された肉芽がビリビリと痺れ疼き、下腹が過剰なまでの緊張を強要される。緊縮コスチュームの腹部にしなやかな腹筋の輪郭が浮かび上がった。
「つはあぁぁぁぁ〜んッ!!」
甘く裏返った泣き声を喉奥から迸らせ、白き守護戦士の肢体が痙攣する。
「いい声だ。その声をもっと聞かせてもらいますよ。いや、僕が声を出させてあげます」
興奮した声を上げて、青年はさらに股布をねじり上げる。ギュチッ、ギュリリッ！　薄布の軋む音を立てて、コスチュームがきつく絞り上げられた。
「おやめなさい……ッ!!　くぁぁ……あぅぅ……んッ！」
背筋の湾曲がさらに強められ、バイザーに包まれた美貌がのけぞって真上を向く。
真空パック状態だった乳房もひしゃげ、弄り吸われて勃起したままの乳首が柔肉の中に深々と押し込まれていた。自らの乳球に圧迫された肺から空気が押し出され、変幻戦士は絶息寸前の苦しげな喘ぎを響かせる。
（こんな奴に……こんな恥ずかしい格好を……ッ！）

強烈すぎる圧迫を受けて胸が反らされ、尻をグンッ！　と突き上げたオブジェのようなスタイルで固定されたまま白き変身少女は苦悶した。その姿はさながら天に向かって咆哮する美獣のごとき有様だ。

「いいざまですよ。ロボ兵士を軽々と破壊するあなたが、僕の片手で泣き喘いでいる」

満足げな表情を浮かべ、青年はさらにきつく右手を絞り上げる。

見事なお椀型だった乳房が変形を強要され、行き場をなくした乳肉が両脇からムニュリとはみ出す。薄く強靱な股布はギリギリと股間に食い込んで乙女のワレメを過剰なまでに浮き上がらせ、尻の谷間をさらに深く刻み込んでアヌスをも責め立てている。

先ほどまでの瘤縄責めで感度を上げた二穴がビクビクと痙攣し、甘痒い悦波が沸き起こって下半身を痺れさせた。

「苦しいですか？　締めれば締めるほど収縮してゆくように、あなたのコスチュームを変化させていただきました。だから手を離しても、ほら、このとおり……」

青年が手を離しても、絞り上げられた布地は元に戻らなかった。コスチュームに押し潰された乳房のせいで呼吸もままならず、秘裂に食い込んだ股布は、そのまま性器を分断してしまいそうな圧迫感で変幻戦士を責め立てている。

「やっ、やめ……やめてぇぇぇ！　身体が……潰れちゃうっ、折れちゃう……ッ！」

尻を突き上げ、首を反らした「猫の背伸び」のようなポーズのまま、イリュージョンステラは苦悶する。

切れ切れの呼吸のたびに、ゾクッ、ゾクゾクッと鳥肌立つような悦波が沸き起こる。容赦のない圧迫を受けた性感帯が、痛みを快感に変換させているのだ。
（いけませんわっ！　こんなことをされて感じるはずが……感じちゃダメぇ！）
胸の内で自分を叱咤する変身令嬢であったが、先ほど迎えさせられた絶頂で吐き出し尽くしたはずの肉の疼きがどんどん蓄積されてゆく。
「そのままでは苦しいでしょう？　お口で僕たちに奉仕してくれたら、コスチュームを元に戻して差し上げますよ」
ステラの顔の前に回り込んできた青年は、そう言って股間の牡器官をひくつかせる。
欲望ではち切れんばかりにたぎり、限界勃起した牡槍であった。
「嫌ッ！　そんなこと、お断りですわっ!!」
のけぞり状態で固定されたまま叫ぶ変身少女。怒りと嫌悪に震える身体が、コスチュームのさらなる収縮を呼び、被虐快感の炎で令嬢のプライドを焼き焦がしてゆく。
「坊やたち、いきなりくわえさせるのはせっかちすぎるわよぉ。せっかくの獲物ですもの。もっと段階を踏んで汚していかなきゃもったいないわ」
それまで傍観していたヴァネッサが横から口を挟んできた。
「……それなら、こういうのはどうです？」
青年は変幻戦士の金髪を荒っぽく掴み、腰を突き出した。
くちゅるっ、先汁の粘着音を立てて亀頭が突いたのは、変身少女の顔を半ばまで覆った

バイザーであった。どのフォームに変身しても常に彼女の顔を覆い隠している、いわば変幻戦士のトレードマークとも呼べる装着品だ。

「ひうっ！」

予想外の攻撃に見開かれたステラの目の前で、バイザーに亀頭が押し当てられる。鈴口のワレメがクチュッと開き、尿道口から粘りの強い先汁が溢れ出して視界を汚した。

むせ返りそうな性臭と淫熱が伝わってくる。

「やぁっ！　おやめなさいっ！」

汚辱感に美貌を引きつらせ、顔を逸らそうとする変幻戦士であったが、限界まで収縮して身体を締めつけるコスチュームのせいでビクとも動けない。それどころか、身じろぎしたせいでさらに収縮した股布が食い込み、クリトリスが恥骨にギチギチと押しつけられる。

痙攣した陰唇が、食い込んだコスチュームを咀嚼するように卑猥に蠢き、膣内を灼熱させて愛液が分泌されるのがはっきりと自覚できてしまう。

「はあうっ！」

爆風のようにこみ上げてくる悦波に息を詰まらせ、固く目を閉じる変身少女。

「目を閉じちゃダメ！　市長のお嬢ちゃんに電気が流れちゃうわよぉ」

褐色肌の女が機先を制してくる。

「う……くぅぅ……ッ！」

悔しげに呻きながら目を開いた変幻戦士の眼前で、猛った牡槍がスライドする。勃起し

たペニスなど至近距離で見たことのなかった彼女にとって、バイザーに先汁を塗り込みながら這い回る亀頭は、おぞましい軟体生物のように見えた。
「んむぅぅ……冷たくって、なかなかいい気持ちですよ。さあ、諸君も一緒にイリュージョンステラを嬲ってやろうじゃないか！」
リーダーの呼びかけに、少年たちが群がってくる。欲望の血潮ではち切れそうな牡槍の穂先が変幻戦士の顔を包囲した。少年たちは腰を寄せ合い、互いのペニスを擦れんばかりに近づかせてくる。血色も大きさも、形状も微妙に違う牡槍の穂先が眼前に群れる。
（この連中……絶対に許しませんわッ！）
屈辱感に震えるステラの顔めがけて何本もの勃起が交互に突き出され、バイザーに亀頭を擦りつけてくる。視界一面を濡れて張り詰めた牡器官が埋め尽くした。
くちゅ、ぬちゅ、キュッ、キュイッ、キュイイッ……ちゅくっ……。
かすかな粘音と耳障りな摩擦音を立てつつ、牡器官の先端が視界いっぱいに広がって変身少女のトレードマークを汚す。目を閉じることも許されぬ少女の視界が、塗りつけられるカウパー腺液で次第に歪んでゆく。
（わたくしの顔が……汚される……こんないやらしいケダモノどもにッ!!）
屈辱と不快感に顔を歪める変身令嬢の視界に入ってくるのは何個もの亀頭のみ。汁まみれになったバイザーに隙間なく押しつけられ這い回る鈴口の群れだけだ。卑猥な吸盤を持った軟体動物の大群に襲われているようなおぞましさに身体が震えてしまう。

『最終回　陵辱の果てに』より　その１

ぺろ、ぺろっ、れろぉっ。
たっぷりと唾液を乗せた舌が肛門を舐め回した。排泄孔を熱いぬめりに撫でられるこそばゆい感触が瞬時に快感に変わり、美尻が勝手にくねってしまう。
「ひぁ！　いっ、ひゃうんっ！」
ざらついた舌が放射状の小皺を舐め弾くたびに、全身がキュンッ！　と引き絞られるような鋭い快感が連続して湧き起こって令嬢の声を裏返らせる。
ひと舐めされるごとに羞恥心がぬぐい取られ、妖しい疼きが塗り込まれてゆく。媚毒に蝕まれた身体は、全身が性感帯と化しており、元から性感を秘めていた部分の感度は恐ろしいほどに上がっている。そこを魔性のテクニックで嬲られて耐えられるわけがなかった。
「そんな……お尻……お尻そんなにしたらダメえぇぇ！」
ピチュピチュというわざとらしい舌なめずりの音を立ててすぼまりを責められ、甘く裏返った声を上げる財閥令嬢。
放射状の小皺を丹念に舐めほぐされ、菊花状に引き結ばれた中心を舌先で執拗にほじり返されて、黒髪の令嬢は肛悦に酔わされてゆく。子宮で燃え盛っていた淫欲の炎がアヌスにまで燃え移り、唾液に濡れ光る排泄孔が物欲しげな収縮を始めた。舌先で可愛がられている入り口よりもずっと奥深い部分に、気が変になりそうな疼きが溜め込まれてゆく。このままでは狂ってしまう……そう思った瞬間、唾液の糸を引きつつ舌が離れた。
「あぁんッ！」

さらなる愛撫をせがむかのように、くいっ！　と美尻が持ち上げられた。直腸奥に溜め込まれた疼きの炎に炙られて、精液に濡れた白シャツをぴっちりと張りつかせた半裸身が切なげにくねる。

「お尻が疼いて変になりそうでしょう？　その疼きはチンポを突っ込んで思いっきり掻き回してもらわなければ決して消えないわよ」

絶頂寸前でお預けを食らわされた少女の美尻を見下ろして、褐色の陵辱者は告げる。

「やっ、いやぁ……狂ってしまいますわっ！」

泣き顔になって下半身をよじらせる令嬢。尻孔の奥で燃える疼きの炎は悶えるほどに強まってゆく。桜色に染まった美尻が艶めかしくうねるのを止められない。

「おねだりしなさいな。あなたが拒むのなら、あっちのお嬢ちゃんのお尻の穴にみんなが突っ込んじゃうわよ」

いまだに失神したままの佳乃の方を向き、ヴァネッサが告げる。脅迫と疼きの二段構えで追いつめられた令嬢の美貌が苦悩に歪む。

（ダメ……佳乃……狂うッ！　もう……ダメぇ……）

肉体と精神の双方で追いつめられ、忍耐を知らぬ令嬢の逡巡は長く続かなかった。

「……わたくしの……おっ、お尻の穴に、オチンチン挿れてくださいぃ！　も、もうっ……ガマンできないいっ！」

屈服の叫びを甘く切なげに響かせ、令嬢はもっとも恥ずかしい部分への陵辱を哀願する。

むっちりと豊かな尻肉の谷底で、背徳の門がヒュクッ、ヒュクッと淫靡に蠢く様が巨大スクリーンに投影され、観衆の淫虐心を煽り立てた。

全裸の若者たちの間から歩み出てきたのは、リーダー格の青年だった。インテリっぽい顔立ちに淫らな期待に満ちた笑みを浮かべている。

「あなたのアナルバージンは僕がいただきます。締まりがよさそうないやらしい肛門だ」

興奮に震える声で若者は言うと、勃起に手を添えて角度を調整し、腰を進めてくる。慎ましやかなすぼまりに、熱く猛った牡槍の先端が押し当てられた。唾液に濡れまみれた肉門に、粘りの強い先走りが塗り込まれてゆく。

「ふぁ……あぁぁ……」

生乾きの精液をこびりつかせた美貌が、安堵と絶望の入り交じった複雑な喜悦の表情を浮かべる。刺激に反応して小刻みに収縮する菊穴の感触をしばし楽しんでいた若者は、勝ち誇った笑みを浮かべて挿入を仕掛けてくる。

ぐ、ぐっ、ぐぐぐっ！　と圧力が強まり、牡器官が侵入してきた。緊張した括約筋リングが強引に押し広げられ、鋭い痛感が尻穴を襲う。

「つあぁぁぁぁ〜んッ！」

甘く裏返った声を上げてのけぞる財閥令嬢の肛門に、容赦なくペニスがねじ込まれてゆく。ミルクティー色の慎ましやかなすぼまりが限界まで押し開かれ、灼熱の拡張感が尻を包み込む。入り口を突破されると、あとは拒むすべもなく一気に根本まで突き込まれた。

「かは……あうぅ……」
かすかな排泄欲求を伴った異物挿入の感触に眉を寄せ、喘ぐ令嬢。最初に感じた痛みは消え去り、拡張感と奇妙な充足感がアヌスの内側を満たしている。
「くう……凄くきついですね。動きますよ」
挿入を果たした青年は、予想以上に強烈な締めつけに快感の呻きを漏らしつつ、緩やかなストロークでアヌスを犯す。肛門をまくれ返らせてペニスが引き抜かれてゆく感触で悦感が一気に高まってゆく。抜け落ちる寸前まで腰を引き、一気に奥まで突き入れられた亀頭が結腸部を突き上げると、絶頂が灼熱の爆発となって背筋を駆け抜けた。
突き込みのたびに悦波が背筋を走り抜け、連続して果てさせられてしまう。
「ひぃ！　いっひぃぃぃぃぃ～んッ!!」
内臓全体が歓喜にわななくようなアナルエクスタシーの連続に、長く尾を引くよがり声が止まらない。背骨が蕩けてしまうような喜悦のピークが延々と続く。
「お嬢様、気持ちいいですか？」
腰を使いながら、慇懃な口調で青年が訊いてくる。
「気持ち……いいっ！　お尻が気持ちいィッ！」
震える声で答える令嬢。淫らな言葉を叫ぶたびに被虐の快感が強まってゆく。
「どこに挿れられてるのか言ってください」
「お尻ッ！　お尻の穴あぁぁぁ～んッ！　やあっ、イくッ！　イクうぅぅぅ～んッ！」

甘く透き通った声を響かせて、敦子は何度目ともわからぬ絶頂へと舞い上がる。全身が甘く痺れ、重力の感覚が失せた。ひときわ強く尻孔が引き絞られ、背骨の芯を絶頂の稲妻が貫く。直腸の絶頂感がヴァギナにまで燃え移り、床に伏した半裸身が激しく痙攣する。

「初めてなのにこんなに派手にイくなんて、あなたはいやらしいですね。淫乱お嬢様のお尻の中に……出してあげますよっ！」

肛門を犯していた若者が低く呻いて射精を開始した。絶頂に震える肛門括約筋が射精中のペニスを締めつけ、放出の快感を大幅にアップさせている。

「くうっ、夢みたいですよ。財閥に生まれ、実力も美貌も天から与えられたあなたのようなお嬢様のお尻をこうして犯しているなんて……」

鬱屈した劣等感をスペルマに変えて直腸内に放ちながら、青年は満足げな表情を浮かべて告げる。紅潮した尻肉が掴まれ、荒っぽい指遣いで揉みまくられた。

「くぁ……あ……あふぅぅぅん……ッ！」

絶頂感に翻弄されている少女は、尻たぶを揉まれながら力なく呻くのみである。

「ほおら、お尻でたっぷりイったところでご奉仕再開よ。両手とお口も動かしなさい！」

「お嬢様、俺たちの夢も叶えてくれよ」

「ボクの夢は全穴制覇です。やらせてもらいますよ！　まずは口！」

再び群がってきた少年たちがペニスを握らせ、獣の姿勢で肛門を犯される少女の口に勃起をねじ込む。スペルマの味がする肉棒を突き込まれた喉が震えた。

（気持ちいい……犯されるの、気持ちいい……ッ）
淫悦の虜となった令嬢は口の中のペニスをチュウチュウと音を立てて吸い、突き込みに合わせて腰をくねらせて、射精中の牡槍からさらなる快感を搾り出す。
「出すぞッ！　お嬢様の口に……くううっ！」
ビクビクと激しい脈動を開始したペニスの先端から特濃のスペルマが口腔内にぶちまけられる。男の味が舌の上に粘りつき、精液のきつい臭いで頭の芯が痺れた。
「んぶううんっ！」
舌の上で弾ける絶頂粘液の熱さと勢いに呻く敦子の掌に、熱いぬめりがぶちまけられる。突き込みのたびに揺れるたわわなバストにも亀頭が押しつけられ、乳首を嬲った。全身性感帯の快感にペニスの疼きが上乗せされ、未踏の悦楽世界に令嬢を誘ってゆく。
「あなたの肛門、締めつけも中の蠢きも最高でしたよ」
射精を終えたペニスが尻孔から抜けるやいなや、別の少年がすかさずヒップを抱え込む。淫情に猛った牡槍が、エクスタシーの震えが残る膣口に抉り込まれてくる。
「くはぁぁんっ！」
最高潮まで感度を上げたヴァギナに滑り込んできたペニスで子宮を突き上げられ、官能が一気に弾ける。ヒップと下腹がキュウッと収縮し、膣内の勃起を締め上げて痙攣した。女の膣に備わった射精誘引の機能がフル稼働して、挿入された勃起を歓迎する。
「くううっ！　会長のオマ〇コ、すげぇ気持ちいい」

絶頂痙攣に震える白いヒップに下腹を打ちつけながら、挿入した少年が歓喜の声を上げた。若い欲望のたぎりのままに、夢中になって腰を使い、絶頂へと突っ走ってゆく。ペニスの根本にむず痒い射精衝動がこみ上げてくる快感が、敦子の身体にも転送されてきた。

「出してぇ、わたくしのオマ〇コに、精液……ッ！　精液注ぎ込んでぇ！」

肉悦に支配された令嬢は、淫らな本能の命ずるままに震える声ではしたないおねだりをしてしまう。膣壁が淫らに蠢いてペニスを吸いしごいた。

「出してやるっ、出すぞぉ……おおおうっ!!」

キュウキュウと締めつけてくる肉壁をこじ開けるようにして抽挿を続けた少年は、満足げな呻き声を上げて弾けた。

連続絶頂で弛緩した身体が引き起こされ、前後から挟み込むようにして抱擁される。

「う……ぁ？　あはぁぁぁ～んッ！」

膣口と肛門に同時に牡槍がめり込んできた。精液で重く濡れた黒髪が荒々しく掴まれ、喘ぐ朱唇にペニスをくわえさせられる。スペルマまみれの両手も勃起へと誘導された。牡汁のぬめりを利用して乳房を揉みしだかれ、勃起乳首をしごきまくられると、それだけで何度も絶頂してしまう。

「すげぇ！　お嬢様の身体って、こんなにいやらしくって気持ちよかったんだ！」

「これから毎日犯してあげますよ、会長ッ！」

前後からサンドイッチした少女の身体を揺すり上げて犯しつつ、アナルとヴァギナを貫

『最終回　陵辱の果てに』より　その２

（おじいさまの嘘つき！　薬効の暴走どころか、とんでもないパワーを得ているではありませんかッ！）

金属触手でがんじがらめにされてしまいながら、胸の内で祖父に愚痴る変身令嬢。

「捕マエタァァァァ～」

凶科学者の巨大な醜貌が床面いっぱいに浮き出し、脂ぎった笑みを浮かべる。触手に緊縛された三人の変身ヒロインは、巨顔の前に横並びで吊るされた。

フェンサーキャットとガンメイドは、打ち倒された衝撃で失神してしまったのか、ぐったりとうなだれたままである。

「お放しなさい！　このバケモノッ!!」

触手で簀巻きにされた身体を悶えさせ叫ぶイリュージョンステラ。陵辱に対する恐怖と嫌悪感で、バイザーの下の美貌が引きつっている。媚薬の影響を脱したとはいえ、先ほどまで快楽に翻弄されていた身体はまだ火照り疼いているのだ。この状態で淫らな責めを受けたら確実に乱れてしまうだろう。

（もう……もう嫌ッ！　あんな目に遭うのは二度とごめんですわッ……）

半狂乱になって泣き叫んでしまわぬだけの自制心はかろうじて残っているが、陵辱に対する恐怖で身体が震えてしまうのは止められない。

「ぶじゅるるる……いりゅうじょんすてら……犯ス！　妄想デンパ、ハッシャぁ！」

大きく見開かれた巨大ビドーの両目が赤光を放ち、邪悪な変身波動が放たれた。変身ヒ

ロインたちのコスチュームが赤く妖しい光に包まれて変化してゆく。
ステラのコスチュームは、乳房と股間の部分が丸く切り取られたようになっており、秘めやかな部分が剥き出しになっていた。陵辱者たちにたっぷりと流し込まれた精液が、二つの穴から流れ出して内腿を伝う。
「グブブブ……たーっぷり犯シテやろう」
粘液の塊のような触手が壁面や天井、至る所から伸び出してきた。それらの先端には、粘液で形成されたビドーの顔がついている。大振りなリンゴサイズの醜貌は、クラゲのように半透明でプルプルと震えていた。
ペニスの疼きに身悶えるメイドとネコミミ剣士には目もくれず、好色そうな笑みを浮かべた顔付き触手は白き変身少女を取り囲む。
「放しなさいっ！　このバケモノッ!!」
拘束を振りほどこうと身悶えしつつ叫ぶ変幻戦士。
「可愛イおっぱいジャ……」
乳房に近づいてきた二つの顔が声をハモらせて言った次の瞬間、獲物を呑み込む蛇のように口が大きく開いた。
ちゅぽおっ！　いっぱいに開いた口腔内に、双乳が丸ごと吸い込まれる。粘液の顔を透かして、半透明の舌が乳首をコロコロと舐め転がしているのがはっきりと見えた。粘液舌に舐め嬲られ、たちまちのうちに乳頭が硬く尖り勃ってゆく。フレッシュピンクの突起に

粘液舌が絡みつくたびに、乳房全体がビリビリと痺れ震えた。
「ワシの舌には快感神経を強烈ニ刺激スルパルス電流が流れておル。最初は痛いガ、じきに気持ちよくなるゾ、狂うほどにナァ！」
化け物に変身してもなお、ビドーの解説好きは相変わらずであった。
「くはぁ、あっ、ひっ、そんなに吸っては！　舐めてはッ！　やはぁぁぁ〜んッ‼」
チュバチュバと音を立てて乳房全体を吸いしごかれ、帯電した舌で乳首を執拗に舐め転がされて震え悶えるイリュージョンステラ。腰の奥でまだくすぶっていた淫情の炎が再び燃え上がり、理性と股間が蕩けてゆく。
「もっともっと狂わせテやろウ……」
拘束された身体にいくつもの顔が這い寄り、電気舌をヌロヌロと伸ばしてきた。うなじが舐められ、紅潮した耳が甘噛みされる。
剥き出しになった股間にもねっとりと舌が這わされた。
陰唇の縁を執拗に舐めくすぐられると、電気刺激に反応したヴァギナがビクビクと痙攣し、膣内に残留していたスペルマが、ぴゅっ、ぴゅるうっ、と勢いよく射出された。
尻たぶを何枚もの舌が這い、アナルの蕾を四方から包囲されて舐め開くようにしながら悪戯される。括約筋が痛いほどの収縮を繰り返し、性感帯として目覚めてしまった直腸が卑猥な蠕動を起こした。キュッ、キュンッ！　と痛いほどに引き絞られるアヌスの内部で、男どもが注ぎ込んだスペルマが渦巻き攪拌されている。

「ソロソロいかせテやルゾ……」
秘裂を責める舌の動きが激しさを増した。半透明の口腔内で勃起乳首が激しく吸われ舐め転がされる。膣口と尿道口に細い舌先がプチュリと挿入され、粘膜の内側にまで快楽のパルスを注ぎ込む。
「ふぁ！　あぁぁぁ～」
白い密着コスチュームに包まれたスリムな腹部を波打たせ、恥悦の痙攣を起こす変幻戦士。快感神経をダイレクトに掻き鳴らす電撃に、極上プロポーションの肢体が悶え狂う。
「コレでフィニッシュじゃ！」
秘裂の上端でしこったクリトリスに喜悦電流の青白いパルスをまとった舌が絡みついた。陰核が弾け飛んでしまうかと思われるほどの超刺激を送り込まれ、しなやかな半裸身が折れんばかりにのけぞった。
「くはぁぁんッ！　もっ、もう……ダメぇぇぇ！　イ……クウゥゥゥッ!!」
変幻戦士は、金色のロングヘアを振り乱して果てる。濡れ蕩けた秘裂が激しい収縮を起こし、失禁と見まごうばかりの愛液をしぶき迸らせた。
床いっぱいに広がった巨顔に降り注ぐ絶頂の証を、分厚い唇から伸びた舌が美味そうに舐め拭い、粘ついた卑猥な笑みを浮かべる。
「いい反応ジャ。三人揃ってもっと狂わせてヤロウ！」
ビドーの目が赤光を放ち、フェンサーキャットとガンメイドに妄想電波を浴びせかける。

「あああんっ！　こんなのいやですぅ！」
「にゃはぁぁんっ！　オチンチンやだぁ！」
意識を取り戻した二人が、身をくねらせて声を上げる。重武装メイドとネコミミ剣士の股間からは、ステラが生やされたのと同じような疑似ペニスがそそり勃ってひくついていた。鈴口のワレメにはすでに透明な先走りが滲み出してきらめいている。
「ああ、なんてことなの……」
切なげに身悶えする二人を交互に見やり、絶望的な声を上げる変幻戦士。それがもたらす射精衝動に決して抗えぬであろうことは、ステラ自身がいやというほど知っている。
「せっかく生えたペニスじゃ、たーっぷりと使ワセテやろウ……」
フタナリ化したメイドとネコミミ剣士が、変身令嬢を前後から挟み込むように配置された。何をされるのか察した三人の表情が引きつる。
「ああんっ！　ダメですぅ」
「ニャハァァ！　やめろぉ、このバカ学者ァ！」
声を上げて身悶える二人の身体が近づき、ひくつくペニスの先端が二つの濡れ孔にあてがわれる。超敏感な亀頭部を熱く蕩けた粘膜に擦られただけで、二人の変身少女は声も出せずに痙攣した。
「やっ……おやめなさいっ!!　あはぁぁぁ〜ッ!!」
ぐちゅうっ、ずぷううっ！

恐怖に裏返った制止の声よりも早く、ヴァギナとアヌスに疑似ペニスがめり込んでくる。前にフェンサーキャット、後ろにガンメイドのフタナリペニスがずっぽりと挿入されていた。輪姦によって甘くほぐされていた二つの柔孔は、いきり勃った偽根をあっさりと受け入れてしまう。

「ぬ、抜きなさいッ……抜い……くはぁぁ〜ンッ！」

ペニス快感を堪えきれぬ二人の腰が動き始めた。

恐れていた通り、魔悦がステラにもフィードバックされてくる。一本分でも発狂しそうだったあの超快感が二本分。性感が一気に燃え上がり、変幻戦士の理性を爆散させる。注挿のたびに股間から発生した絶頂の爆風が頭頂部まで吹き抜け、白き守護天使は白目を剥いて痙攣するばかりである。

ぬちゅ、くちゅ、くちゅ、くちゅるっ……体内に残留していた男どものスペルマを掻き出しつつ、二本の偽根が交互にストロークする。薄い肉壁越しに超敏感な亀頭が擦れ合い、増幅された快感が絶頂の落雷となって変身少女たちを打ちのめす。

「すっ、ステラ様ごめんなさぁい、でも、でも止められないんですぅ！　オチンチン融けちゃうううっ！」

鳴き声を交えて詫びながらも、変幻戦士のアヌスを犯す腰の動きが止められないガンメイド。変幻戦士の背中に巨乳をタプタプと押しつけつつ、ぎこちない腰遣いでペニスを注挿する。ピストンされるアナルの快感と、痙攣する括約筋にキュウキュウと締め上げられ

る偽根の魔悦が、ステラの肉体を快感一色に染め上げてゆく。
「にゃあぁぁぁ〜んッ！　ステラ様の中熱いッ！　熱いよぉ！　気持ちいい、気持ちいいのぉ!!　オチンチンで変になっちゃうのぉ！」
ヴァギナを犯すフェンサーキャットも、発情した牝猫そのものの声を上げながらカクカクと腰を振りたくって子宮をこねてくる。
「ひはぁぁぁーんッ!!」
甘い悲鳴を上げてのけぞった変幻戦士の唇に、快感に酔わされたガンメイドがむしゃぶりついて激しい吸引を仕掛けてきた。
口腔内に溜まった唾液がチュルチュルと音を立てて吸い取られ、熱い舌が侵入してくる。奔放にくねる侍女の舌に口の中を掻き回され、押し寄せる悦波に目の前が白く染まった。
「にゃはぁん！　ステラ様の、おっぱい……はむうん……」
前後からの突き込みに揺れ弾むステラの美乳に、フェンサーキャットの舌が這わされる。ピンと勃ったピンクの乳先に猫舌が絡み、ショリショリと音を立ててしゃぶり立てた。
「んんんん〜ッ!!」
ガンメイドに口を塞がれたまま、白き変身少女の身体が痙攣する。
「オマエタチにも挿れてやろウ……」
コスチュームを貫き、メイドと剣士のヴァギナとアナルにも顔付き触手が突き込まれた。
「きゃわぁぁぁぁーんッ!!」

二人の変身少女が上げる甘い悲鳴が空気を震わせ、ステラの中でペニスがさらに硬く大きくなってしゃくり上げる。
「モットモットよがるのジャ！」
電気舌がGスポットを集中的に舐めしゃぶり、直腸内で旋回する。強烈すぎる快感に強張った二人の身体にメカ触手が絡み、変幻戦士を犯す動きを再開させた。
緊縛され操られるフタナリ少女のペニスは、人間には絶対に不可能な速度と激しさで前後の穴を抉り抜き掻き回す。三人の上げる甘い悲鳴が響き合い、注挿の粘音と入り交じって淫らなハーモニーを奏でた。
黒のメイド服とピンクの猫コスチュームに挟まれて、白き天使がよがり狂う。共催ピストンで濡れ孔を抉る疑似ペニスの注挿はさらに激しく速くなり、射精の前兆である脈動を開始した。
「だめですぅぅ、出ちゃうっ！　もう出ちゃいますぅ！　ふわぁぁぁぁぁ〜！」
「うみゃぁぁぁ！　アタシも出ちゃう、オチンチンイっちゃうにゃはぁぁぁ〜ン！」
「イっ、イくうふうぁぁぁぁぁぁ〜ンッ!!」
最大級の絶頂に舞い上げられた変身少女たちの絶叫が空気をビリビリと震わせた。
子宮口と結腸部にきつく押し当てられた亀頭がひときわ大きくふくらみ、爆ぜる。
ドクンッ！　ドクウッ、ビュルッ、ビュルッ、ブビュルルッ！　ブシャァァッ！
膣と直腸内に、熱いスペルマがぶちまけられた。射精の快感、放出量ともに十倍以上に

増幅された超射精である。
「キヒャアァァァァァ〜ンッ!!」
二人分の射精エクスタシー叩き込まれたイリュージョンステラは、断末魔のごとき絶叫を上げて上り詰める。膣口とアヌスは脈動するペニスをきつく締め上げ、子宮と直腸は注ぎ込まれる絶頂エキスを残らず飲み干そうと淫らな蠕動を起こす。
膣と直腸内での脈動は十分近く続いた。
重火力メイドとネコミミ剣士は超絶の射精快感に意識を吹き飛ばされ、白目を剥いて悶絶している。
許容量を超えるエクスタシーに打ちのめされたステラは、両脚をピーンと突っ張らせ、白いコスチュームに包まれた肢体を断続的に痙攣させて息も絶え絶えといった有様だ。
バイザーの下で見開かれた目は焦点を失い、半開きで喘ぐ唇の端からは唾液が止めどなく溢れ出し滴っていた。
ペニスに貫かれた二つの穴からは、白濁の絶頂ジェルがトロトロと溢れ出し、真下に開いた巨大な口へと垂れ落ちている。
おびただしい射精でエネルギーを使い果たした二人の身体が、光に包まれて変身解除されてゆく。失神した市長令嬢と巨乳メイドは無造作に床へと転がされた。
ぐったりとうなだれたステラの目の前に、ひときわ太い触手粘塊が伸びてくる。その先端には実物大の脂ぎった顔がついていた。肌も血色の悪い男の顔色だ。それがどうやらビ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/